博物館の時代がやってくる

ほんらい人間というのは、好奇心に富んだ知的な探求心にあふれた動物です。博物館から数々の刺激をうけて、抱いた夢や希望を広げて行くのはあなた自身なのです。

石原 義剛
海の博物館館長

6000館を超えた博物館

全国で博物館の数は6000館を超えたといいます。どこの町へ行っても2つや3つの、テーマも展示もバラエティーに富んだ博物館や記念館のある時代になりました。博物館がそのエリアを紹介するビジター・センターや地域の学習センターとしても役割を果たす時代になりました。わたしは21世紀は「博物館の時代」になるだろうと期待し、信じています。

新しい博物館像について、梅棹忠夫さん（大阪万博跡地に国立民族学博物館を創設し、古い博物館のイメージを一新した初代館長）は次のように言っています。

『博物館は市民に対する教育の場、あるいは啓蒙のための装置とは考えていません。博物館は、既成の価値体系をおしつけるためのものではありません。博物館は、市民の知性を刺激し、人間精神を挑発することによって未来の創造に向かわしめるための、刺激と挑発の装置であります。』

博物館の主人公はあなたです

わたしも『未来の創造』に向かって市民を『刺激し、挑発する』という発想につよい共感を覚えます。このことは、博物館は市民を挑発するけれども、ほんとうの博物館の主人公は市民であることを示しています。ほんらい人間というのは、好奇心に富んだ知的な探求心にあふれた動物です。博物館から数々の刺激をうけて、抱いた夢や希望を広げて行くのはあなた自身なのです。博物館がやっとそんな人々の好奇心に応えられる装置に育ってきたと思います。

その証拠に、博物館を訪れる人の数は年々増えていますし、博物館に特別な見学プログラムを求める入館者も現れました。単なる展示の見学だけでは満足せず特定の分野や特別解説を要求されたり、体験学習や館外ツアーを求める市民も漸増しています。博物館は自分たちで積極的に使っていくものだという意識が広がっているのはうれしいことです。まだまだ不十分な博物館に対する率直な提案や厳しい批判が寄せられることを博物館は待っています。

博物館の本当の仕事は

ところで、入館者であるあなたが、これが博物館だと思っているのは、展示という博物館の一部分にすぎません。展示には“展示物”（博物館では『資料』といいます）が置かれ、展示物の理解を助けるため、模型や文字やイラストレイションで、時にはビデオ映像の解説がつけられています。解り易く楽しく説明しようとするあまり、過剰に演出されすぎた展示まで現れます。そして展示の印象が博物館の印象を決めてしまいますし、博物館のすべてだと、あなたには見えることでしょう。

しかし実は、博物館でもっとも大切なのは“展示物”すなわち『資料』なのです。展示に使用される“展示物”はその博物館の所蔵する全『資料』の5%とか10%の範囲であり、大半の博物館『資料』は収蔵庫という特別な倉庫の中で大事に保存されているのがふつうなのです。『資料』を収集すること、そして保存すること。そこに博物館の存在意義がありますが、人々にはほとんど知られておりません。博物館ではこの仕事に学芸員という専門の職員が終日あたっています。学芸員は『資料』を調査し、収集し、清掃し、整理し、記録し、登録し、保存管理します。延々とその繰り返しなのです。わたしども海の博物館ではやっと27年間かけて5万点に達したばかりです。外国では数百万点、数千万点の『資料』を所蔵する博物館がごろごろあり、この点で日本の博物館は大きく立ち遅れているといえましょう。

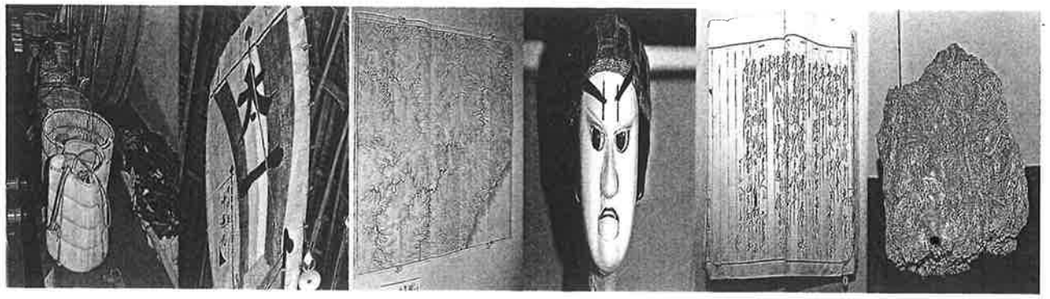
「ホンモノ」が博物館のいのち

いま博物館が注目されつつある最大の理由は、「ホンモノ『資料』」にあると、わたしは思っています。現代は、映像の時代、バーチャルな時代、コンピューターの時代などといわれるからこそ、反面「ホンモノ」が求められる時代にあるのではないでしょうか。野外でのホンモノ体験が求められ、自然回帰が叫ばれるのと、同じ感情で博物館の「ホンモノ」が必要とされているようです。わたしども海の博物館が保存する一艘の漁船、一本の釣り針、見様によってはガラクタの山ですが、その一つ一つは我々の先祖から延々と受け継がれて来た経験と叡知の固まりです。時にはわたしたちは、自分の考えで一部分を改変することもありましょう。しかしそんな時でも、必ず受け継がれて来た技術や形をもとに、模倣し変更します。わたしたちは「ホンモノ」にたいする信頼と親近感を本能的にもっているようです。そのような日常的には触れることのできない「ホンモノ」に会える場所が博物館であります。

コンピューターの時代の博物館

日本の博物館にはまだ『資料』が少なすぎるといいましたが、実は一つ一つの博物館では少なくても、6000館から集めれば、大変な量の『資料』群になります。コンピューターの著しい発達は、いままで闇の中にあった博物館資料の全体像を、顕在化さす、すなわち誰にでも利用できるように、公表しようとしています。日本中のさらに世界の、博物館の『資料』が全部どこにどんなに有るか解かり、その『資料』に関する情報を博物館が提供するとしたら、まさにすばらしいことです。すでにインターネットにおいて、先進的な世界の博物館は、膨大な情報を発信し出しています。

博物館が「ホンモノ『資料』」を集積する仕事を使命としているといいました。この「ホンモノ」は一つ一つ凄い質と量の情報源であることはお解りの事と思います。まだ緒についたばかりですが、博物館は、大学や研究機関にない、資料・情報の集積装置として、また、発信装置として、単なる入館者に対する刺激と挑発の装置の域を越えて、産業、科学芸術、教育などあらゆる分野にとっての、欠くことの出来ぬ博物館装置に変身していくことでしょう。21世紀は「博物館の時代」です。



HARVEST・1号 1997.1